

高橋和巳『墮落』にみる〈理想〉の悲劇性  
——文学における戦争責任と戦後認識——

田 中 寛

A Tragedy of Idealism in "DARAKU" by Kazumi TAKAHASHI:  
Responsibility for War and Portrayals of the Postwar-period in Literature

Hiroshi TANAKA

一、高橋和巳と戦後文学

高橋和巳は一九七一年五月三日、上行結腸癌のため東京女子医大病院で自ら命を絶つたように永眠した。享年三九歳の若さであった。前年十一月、三島由紀夫が自衛隊市ヶ谷駐屯地で割腹自殺をして半年足らずの出来事であった。川西政明はこの二人の死を、時代の転換を象徴する死であったとし、この二つの死によって文学における理想主義は滅んだという<sup>注①</sup>。以後、「内向の世代」などの登場によって、主題の対象も社会性のもものから現代社会の個人の内面性をより深くとらえる傾向を強くしていく。とはいえ、三島由紀夫の「殉教の美学」、高橋和巳の「破滅の美学」が与えた影響をどう受けとめるのか、その課題は日本文学の本質を検証する上でも依然として大きく立ちはだかっている。高橋和巳は六朝美文文学を専攻する中国文学の研究者であり、自ら創作、研究（批評）、翻訳を文学総体の作業と意義づけ、小説のほか多くの評論、随筆、翻訳を残して、ときには自己破滅型と称されるようにその生命を切り刻みながら時代を駆け抜けていった。「最後の知識人」として同時代を厳しく凝視し続けた態度、文学的志向は、夏目漱石の苦悩とも対置、論ぜられることもある。だが、今日、彼の文学を語る者はごく少数者に限られているし、また書店で彼の作品を見かけることもほとんど困難な状況である。「一九七〇年代に大江・三島と並んで〈御三家〉と称されるほど人気があった割には研究が進捗していない」印象を受ける<sup>注②</sup>。現在、若い世代で高橋和巳の名を知る者は少数である。同時代の併走者であった三島由紀夫が没後も

なお多くの読者を持って読み継がれているのに対して、高橋和巳の文学は彼の憤死とともに彼方へ消えてしまったかのようなのである。

二〇〇四年のことであった。筆者は英国ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）に学術訪問員として一年間滞在したが、そのときある邂逅があった。学院の図書館には日本文学のコーナーがあり、書棚には河出書房新社の『高橋和巳全小説』が並んでいた。そのどれもが傷みが激しく、何度も補修をした跡があったが、手垢やしみのついた頁に触れるたび、多くの読者（そのほとんどが日本人と思われるが）に英国という異国の土地にあっても熱心に読み継がれていることに深い感慨をおぼえた。かれら読者は、作品を通して再び日本人という自我の原基を見つめようとしていたのだろうか。当時もつばら夏目漱石のロンドン体験に関心を寄せ、日本人の「自我」の確立、確執に苦悩する漱石の姿が現在形で常に筆者の胸中を去来していたとき、この再会によって同じように知識人としての苦悩を背負っていた高橋和巳の文学をも検証する必要があると感じたのであった。同時にそれは、筆者自身の青春期の文学体験への遡行でもあった。

さて、高橋和巳をめぐる今日的評価とはどのようなものであろうか。一九九〇年代に入り雑誌『文藝』で「高橋和巳没後二〇年特集」が組まれたのを始め、村井秀雄（一九九一）、梅原猛他編（一九九一）による書誌的作品、回想集が出版された。一九九六年には没後二五周年を記念して河出文庫から「高橋和巳文庫コレクション」十巻がそれぞれ関連エッセイと女性文学者の巻末エッセイを載せて刊行された。その後、太田代志朗『高橋和巳序説——わが遥かなる日々の宴』（一九九九）、脇坂充『孤立の憂愁を甘受す——高橋和巳論』（一九九九）が続いて出され、さらに今世紀に入って伊藤益『高橋和巳作品論——自己否定の思想』（二〇〇二）が上梓された。また最近では橋本安央『高橋和巳 棄子の風景』（二〇〇七）が清新な視点で高橋文学の原点を描いている。論文では漱石との比較論を試みた槇山朋子『「黄昏の橋」論——あるいは漱石への遡行』（二〇〇〇）、東口昌央『「感情」という不可解なもの——高橋和巳『悲の器』論』（二〇〇六）などがあるが、総体的に少ない印象が否めない。作家論にしろ、作品論にしろ、高橋文学の全貌をとらえる作業は残念なことに進展の兆しさえ見せていない。この研究の寡産は、高橋文学の難解さ、社会的歴史的テーマの重層性、また中国文学からの影響など、多層的な課題が常に圍繞していることにも因っている。

しかし、否定的な評価も一方では顕在する。高知聡はか『高橋和巳をどうとらえるか』に収められた諸論をはじめ、柄谷行人は「高橋和巳の文體」において、過剰な「概念的比喩」、「概念としての不明確さ」を指摘、「要するに、高橋和巳の不幸は、生活の累積が導き出す観念のかわりに、観念の累積が導き出す生活をもったこと」と断言している。またこの延長に立つて主題についても、たとえば文芸評論家の川村湊は「観念的風俗の小説群」と意義づけて次のように述べている<sup>注③</sup>。

六〇年安保から七〇年安保への過程は、ほとんどおびただしい「エネルギー」の放散現象、盲目的なその展開、変転の過程としてしか文学

の世界ではとらえられなかったように思われる。その間に多くの「安保小説」「学生運動小説」「新左翼小説」「全共闘小説」などが書かれたが、高橋和巳の多くの小説作品のように、現在では当時の観念的な風俗を描き出した小説というだけの意味しか持っていない。それは単に「衝動的」なものではないものを「思想的」ものであるかのようにとらえ違い、「風俗的」なものを「理念的」なものと勘違いし続けた作品群のように思える。高橋和巳の『邪宗門』、高城修三の『闇を抱いて戦士たちよ』、三田誠広の『野辺送りの唄』、立松和平の『光匂い満ちてよ』などの作品は、そうした時代風潮において読まれ、消費されてきた。それは「おびただしいエネルギーの放散」が、高度消費経済社会と交差した現代社会において可能だった長編小説なのであり、それらの作品が時代の変化とともに急速に色褪せてしまうことは止めようがなかったのである。(傍点、引用者)

いささか引用が長くなったが、こうした評価・論評は過去の時点に正しく立脚して提起されたものであろうか。また、現代という時点から過去を正しく照射したものであろうか。ここに述べられたように作品群は「衝動的」、「風俗的」なものであったのだろうか。そもそも「理念的」なものの「勘違いし続けた」といった認識はどこから生まれたのだろうか。戦後文学が若い世代をはじめとしてほとんど読まれなくなった現実直面するとき、我々はこうした表層的批評についてなお良心的なものか否かを問い直さなければならない。(過去)から(未来としての現在)へ、同時に(現在)から(過去)へ遡行する問題提起が作品には常に存在するからであり、その複眼的な考察による検証作業こそがその時代を生きた作者、創造された作品に対峙する、批評の誠実な条件でもあろうから。それにしても高橋和巳の文学ほど、評価の分かれる作家は珍しい。生硬難解な語彙表現の使用については十分に意味をなしていない箇所も多く見られるし、文体にしても確立したものとはいえない側面も夙に指摘されている。一方で何よりも高橋文学の精髓は扱った主題の大きさ、またその社会性、政治性であろう。むしろ、文学の営為として作品化するにあたり、主題対象をどう設定するか、どのような人物を全体小説のなかに造型するのか、といったことは偏に作者の文学的指向性にかかっている一方、それを裁断する側も時代の潮流に併呑されやすいのも宿命的なことである。日本伝統の私小説の殻を打ち破り、荒削りながらも想念と実存の共存をめざしたところに高橋文学の真骨頂があったのであり、またそれが彼の文学のアキレス腱、致命傷でもあったということになるだろうか。

文学の変容ということが叫ばれて久しい。没後三六年という濾過された時間は高橋和巳の提起した問題に、その後の文学がどう答えようとしたのかという問いを発してやまない。本稿では高橋和巳の『墮落』を通して、現代という時代から逆照射してみることで、『墮落』という作品を文学における戦争責任、戦後責任という認識の視点から検証してみることにしたい。

## 二、『墮落』の執筆と時代状況

まず作品の書かれた状況背景、作品自体のもつ時代背景のありようを確認する。同時代に進行する戦後体制（レジーム）の変遷を確認すると同時に、それらが作品にどのような影響を与えたかを考えるためである。さらに二つの背景を対照させることによって、作者の語り、社会とのかかわり、視点の位置をより明確にすることができるためである。

『墮落』は著者三四歳のとき、雑誌『文藝』昭和四十（一九六五）年六月号（二十―一〇頁）に掲載された<sup>注④</sup>。中本達也氏の挿画とともに「書き下ろし長編小説二八〇枚」と書かれ、目次には「かつて満州建国を夢み今は社会事業にうちこむ男の突然の転落は何ゆえか？ 新鋭の意欲作」とある。雑誌の表紙には高橋和巳の写真が大きく掲載され、まさに時代の寵児という風貌を漂わせている。

この年、高橋和巳は実に精力的な執筆活動を展開している。まず年明け早々に週刊誌『朝日ジャーナル』に『邪宗門』の連載（一月三日号から翌四一年五月二九日号までの七四回）を開始した。また「野間宏論」（のちに「現代の地獄——野間宏」と改題）を『文学』二月号に、放送劇『詠み人知らず』を『早稲田公論』六月号に、短篇『あの花この花』を『文学界』九月号に、短篇『日々の葬祭』を『日本』十月号に発表している。

さらに河出書房新社の長篇小説叢書の第一作目として『憂鬱なる党派』が十一月に刊行されている。前年末に立命館大学文学部講師を辞職し、本格的な作家生活に入るために九月には鎌倉市二階堂に転居した。

次にこの一九六五年という年がどのようなものであったかを見ておきたい。東京オリンピックの翌年、熱狂が冷め、今後の日本の行く末が問われようとする時代であったが、物価上昇が続き、山一證券の経営破綻などで戦後の経済成長にも翳りがさしてきた頃であった。戦後初の赤字国債が発行されるなど、一種閉塞的な社会状況が生まれた。一方、ベトナム内戦へアメリカが本格的に介入し、沖縄が米軍のB五二爆撃機による北爆の前進基地となるなど、戦後の日本社会、政治に対する転換期が訪れた時期でもあった。日本列島を席捲した学生運動も未明のことであり、もちろん中国との国交回復（一九七二）も未明の状態であった。日本が東アジアにおける戦後処理を残したまま、東南アジア各地に経済「南進」していく物質至上主義の時代。こうした時代状況、時代認識が高橋和巳の『墮落』に少なからぬ影響を及ぼしたことは想像にかたくない。すなわち、敗戦後二十年が経過し、ともかく人間が食って生きる最低限の保証は確保されたものの、その過程において視野脱落した歴史的な「負」の遺産を彼は最も恐れたのであった。それはとりもなおさず戦後日本が看過し続けてきた戦争責任、戦後認識の総体であった。全体小説を志向し、戦後文学の継承者たらんとした高橋にとっては、この時期に確認しておくべき日本人の内患の憂い、歴史的空白（空洞）感が横溢していた。

以下、この一九六五年の事件簿をあげておこう（松原新一・磯田光一・秋山駿『増補改訂戦後日本文学史・年表』などから抜粋）

一月 ILO対日調査団来日。中央教育審議会から「期待される人間像」発表される。インドネシア、国連を脱退。

# 文芸



高橋和巳『墮落』が掲載された『文芸』1965年6月号

二月 原水爆禁止国民会議（原水禁）を社会党、総評諸団体が結成。防衛庁の三矢研究問題化。米、北ベトナム爆撃開始。

三月 山陽特殊製鋼倒産。世界共産党協議会モスクワで開催。中国共産党他六党欠席。

四月 春闘、不況のため激烈。吹原産業事件の黒い霧。ベ平連、初のデモ行進実施。

五月 社会党新委員長に佐々木更三。汚職による東京都議会解散要求のリコール開始。日本テレビ、ベトナム海兵隊戦記第一部を放送。

六月 ベトナム侵略反対の社会、共産両党の一日共闘実現。家永三郎、教科書検定を告訴。日韓会談本調印反対学生デモ、負傷者多数。

七月 第七回参院選、東京地方区で自民党全滅。東京都議選で社会党第一党。B五二爆撃機、沖縄から北ベトナムへ進発。

八月 佐藤首相、沖縄を訪問。長野県松代付近に地震。韓国学生デモ激化。

九月 防衛庁、三矢研究で二六人の処分発表。北ベトナム侵攻の米空母、佐世保に入港。

十月 民社党、日韓条約賛成を決定。富士山麓で地対地ミサイル、リトル・ジョン発射実験。朝永振一郎、ノーベル物理学賞受賞。

十一月 自民党、日韓条約抜き打ち強行可決。東海道新幹線、東京大阪三時間十分で運転開始。

十二月 東京都の人口一千万を越す。フランス、ドゴール大統領再選。教科書問題協議会発足。

題協議会発足。

一九五六年の「経済白書」（七・一七）で「もはや戦後ではない」と謳われて十年、日本は米国追従の戦後社会の軌道を歩みつつあった。それは、憂鬱なる戦後、戦前・戦中の精神的禍根との訣別であった。もう少し前後の事件を追うならば、一九六三年には「生存者受勲復活の決定」（七・一二）、「第一回戦没者追悼式、天皇・皇后出席」（八・一五）、そして翌一九六六年の「建国記念の日」制定などの動きへと連なっていく。

なお、同年の主要な文学的収穫は次のよう

あった（『戦後文学——シンポジウム日本文学』などより抜粋）。戦後文学の総決算ともいべき大作が発表され、戦後文学のひとつの大きな区切りの年であった。

- 一月 『甲乙丙丁』（中野重治）、『姪の結婚（途中より『黒い雨』に改題）』（井伏鱒二）、『『餓死』の思想』（小田実）
- 二月 『朱色の天』（梅崎春生）、『孔雀』（三島由紀夫）、『恥部の思想』（花田清輝）
- 三月 『留学』（遠藤周作）、『厳肅な綱渡り』（大江健三郎）、『自立の思想的拠点』（吉本隆明）
- 四月 『不意の出来事』（吉行淳之介）、『剣ヶ崎』（立原正秋）、『道』（中村真一郎）、自作自演映画「憂国」（三島由紀夫）
- 五月 『超越し』（島尾敏雄）、『戦後を拓く思想』（小田実）、『私の文学散歩』（吉行淳之介）
- 六月 『幻化』（梅崎春生）、『流星抄』（野口富士男）、『大衆文学論』（尾崎秀樹）、『本居宣長』（小林秀雄）
- 七月 『抱擁家族』（小島信夫）、『雲のゆき来』（中村真一郎）、『昭和文学の成立』（小田切進）
- 八月 『熱いレール』（井上光晴）、『私の戦後史』（大岡昇平）、『言葉の芸術』（中村光夫）、『北の河』（高井有一）
- 九月 『無限軌道』（木下順二）、『春の雪』（三島由紀夫）六七年一月、『絶望の精神史』（井上光晴）
- 十月 『五年前の事』（武者小路実篤）、『砂漠の思想』（安部公房）、『日本の心』（木下順二）、『心的現象論』（吉本隆明）
- 十一月 『邯鄲』（福永武彦）、『わたしの華山』（杉浦民平）、『サド侯爵夫人』（三島由紀夫）
- 十二月 『冠者伝』（花田清輝）、『解体』（倉橋由美子）、『高見順の人間研究』（今日出海）

作品はこうした現在進行の歴史とほぼ併走させながら、主人公青木隆造の敗戦からの戦後、さらに満洲国時代の青春期に遡ってその折々の情景が再現される。あたかもそれは清算されない戦後を遡行する精神史でもあった。

### 三、作品の構成

『墮落』は全四章からなる。各章は第一章の6節をのぞき、それぞれ5節から構成されている。この構成は修訂稿でも変わっていない。物語はあくまで現在形で進行し、その中に主人公の感慨、記憶として過去の情景が点綴する。主人公は青木隆造。周辺に兼愛園の職員、水谷久江、時実正子、中里徳雄らが、また過去の人物として満洲国時代のかつての旧友同志、芝安世といった面々が配される。青木の妻房江は精神を病んで療養中であるが、何ら言語を発するでもなく、日常的存在感希薄である。

以下、第一章から物語の流れを見ていこう。その年の秋、東京のある新聞社ホールで功労賞の授賞式典が開かれるが、作品は神戸郊外の兼愛園

という混血児収容所の園長、青木隆造に長年の慈善事業に対して福祉事業団体賞が授与される場面から始まる。青木は五二歳だが、すでに頭髮は白く、自己偽善、自己欺瞞に苛まされ、この受賞を契機に次第に崩壊していく現在と、そこに影を落としつつける満洲でのかつての生活、時間が錯綜し、現実の存在を過去の自我からフラッシュバックするという構成になっている<sup>注⑤</sup>。

作品でとりあげられた最大のテーマは「満洲国」である。昭和は満洲国とともにあった。だが、戦後はその歴史的な負の遺産を正視することなく、経済成長の一途に日本の復興を期待した。その反目はずっと地下鉅脈のように流れている。繁栄の陰にはつねに崩壊したものの荒涼が広がっている。そのことに気付かされた青木隆造はかつて満洲国建設に青春をかけたものの、屈折した生き方を余儀なくされる。満洲での人生をなかば封印したまま、敗戦後は福祉事業団「兼愛園」の園長となり、日本人と米国人兵士の間に産みおとされた混血児の世話をしている。その業績が世間に認められ、新聞社から表彰を受けたとき、彼の内部にある精神の瓦解が始まる。戦後の生き方が自らを封印し、偽装したものであったことを悟るのである。社会のあらゆる隠蔽はとどのつまりは個人の隠蔽にはかならなかった。

本当はこの世のためを思っていた行為ではないと暴露すべきだろうか。それとも私の施設より巢立っていった若者たちの幸せはまた我が幸せでもあると、厚顔な常套句に自己韜晦すべきであろうか。

表彰をまつ時間、さまざまな想念のよぎるなか、水差しから水をくもうとしてコップに「小さな埃」が浮いているのを見つける。その埃は「蠅の死骸」のようにもみえた。その形象が何を意味したのか。自己の内部に消すことできない汚点、苦渋の傷痕。急に目の前がかすみ、何も見えなくなる。そしてもう一人の自己の声を聞く。

——内地にひきあげてきて以来、俺の人生は本当は虚無<sup>ぶな</sup>だった。今の俺は形骸<sup>けいがい</sup>にすぎない。そしてその形骸を称賛しようとするあなた方は、悪意の者か、でなければ虚偽だ。……彼の思弁は式場の雰囲気とは無縁に堂々めぐりした。この壇上にのこのこあがった、耐えがたく俗化した自己。それを薦めた人々、そして拍手の機会をまつている人々、あなた方の道徳もまた恥ずべきだ。(傍点引用者、以下同様)

逡巡の果てに、結局は一言も発することなく「醜い中年の涙」を流し、ハンカチを差し出してきた秘書に肩を抱えられるようにして壇上から控室へ立ち去る。その背後から会場全体からどよめくような拍手が襲いかかる。青木は「それにしても、すべてがあまりにも、みみっちい」と不意

に思う。それが「烈しく振幅した一時の感情のなかでの、もつとも真実に近い感慨」であった。「みみっちい」という感慨。細かくて、けちくさい。しみつたれた料簡。だが、何が物惜しくてけちくさいのか、その実体は漠としてつかめない。おそらく些細なことに大袈裟に称揚する世間の価値観といったものに対する反感、違和感であった。本当は自己内部の問題である筈を、日だまりのなかに引き出されたことの厚顔さに彼自身、自己嫌悪にかられ、ついで良心の呵責に囚われるのである。人間には矛盾した葛藤が渦巻くときが往々にしてある。実際の思考に諍いたい思念というものがある。思ってもみなかったことを口走る。だが、失言も放言も実際に思念していればこそ発せられるもので、政治家のそれと何ら変わることはない。それは内部に蠢くもう一人の自分の声であり、ときとしてそれは自己を破滅させたい悪魔の声にもなる。過去に対する恩讐ではなく、他者には分らない、永遠に癒されぬ苦渋、自己賠償という自責の念に苛まれ続けるのである。「墮落」には「転落」よりはそこに意志的な介在を感じさせる。もう一人の自己があたかも幻覚分身（ドッペルゲンガー）のごとく過去から浮上し、現実の存在を呑みこんでいく。頂点を経験したものが一度は避けえない魔の回廊。そこには栄光のために犠牲にしてきた者たちへの煩悶があり、また幽閉された過去からの反逆が蠢動する。

過去の情景では第一章の冒頭、式典での司会者の紹介という形をとり、それを青木隆造がなぞるような構成をとっていく。すなわち、青木は清冽な理想の志をいだき、東亜同文書院を経て満鉄調査員として満洲国の建設に参画する。上海に設けられた東亜同文書院は一九〇一年の開校から四五年の開校まで中国・アジア重視の国際人を五千人以上も養成し、優れた人材を輩出したが、青木はその一人であった。彼は戦前戦中に「王道楽土の権化」と言われるほどの情熱を燃やした時期があったが、建国の方針をめぐる対立からやがて身を引き、やがて満洲青年同盟の指導者となって、満洲国建設の基幹としての移民政策に取り組んでゆく。しかし、ソ連軍の侵攻、敗戦直後の混乱のなかで、青木は率いていた開拓団の団員を見捨て、さらに妻を捨て、また子供を見殺しにして逃亡、その結果、ソ連軍に捕えられ、二年間のシベリア抑留を経て日本に引き揚げる。このあたりの記述は事件だけの素描にすぎず、なぜ、どのようにといった記述は皆無に近い。舞鶴港に降り立って妻に再会しても何の感慨も湧かない。やがて青木は孤児院の施設をつくり、再出発する。濃密であるべき時間はほとんど捨象され、戦後を生きてきた空白感だけが漂う。

さて、表彰式の当日、同伴した秘書の水谷久江をつれて、式典後に満洲で苦楽をともにしたかつての仲間達の用意した祝賀会に出ることになる。旧同胞は青木の転身をなかば驚き、なかば感慨深げに羨み、元参謀は「一本の真直ぐな箸でも湯につければゆがんで見えるものよ」と青木の戦後を揶揄する。そこで、つい昨日のことのように満洲国国家草案をこの連中達とともに考えていたことを思い出す。この再会が青木の墮落を加速させていくのであるが、この同席した数名は最終章で挿入される政府転覆のクーデターに関わることになる。

司令部の宿舍、審陽館の一室で、満洲特有の砂のように乾燥した雪が窓をうつ音をききながら、滿蒙政權構想を、さらには国家建設草案を

ねっていたのは、たしかこの人物たちだったのだろうか。夢ではなかったのか。(中略)これが国家を築くことなのかと、そのころ幾度も青木は疑った。(中略)彼はそうした過去のバベルの塔の一切を忘れようとしていたはずだった。だが犯罪者が犯罪現場に目に見えぬ糸でひきずられていくように、過去の亡霊たちと顔をあわせてしまっていた。そして虚しく机上についた計画の概要もまた燃えつづける燐のように彼の脳裡にその残骸をとどめていた。

受賞のとき、また旧友との再会の後、青木の内部で何かが崩壊していく。それまでひたすら禁欲的だった男が性の猛獣と化していく。その晩、彼はホテルに泊って秘書水谷久江を凌辱してしまう。翌日、何事もなかったように旧友の墓参を済ませ、二日後に神戸に戻るために秘書と待ち合わせの駅頭に来たときには、すでに帰りたくない、秘書にも会いたくなかったという自暴自棄、後悔の念に襲われる。

第二章では兼愛園が舞台で、数日後、あの式典後の祝賀会に出ていた旧友の一人芝安世が青木を訪ねて来る。かつて起居の世話になった礼を言いに妻に会いたいというので、妻の入院する精神病院に同行する。だが、ここでも事実の点描だけで妻の症状のこと、日常生活の情景などは一切切り捨てられている。水谷久江はその芝に向かって、もう青木を訪ねて来ないでほしいと訴える。「もと、満洲でご関係のあったという人がお見えになるたびに、青木先生は、段々と、暗いくらい、こわい、こわいお人になっていくんですから」と。芝は意味深げに青木に向かって「子供さんたちによろしく」という。妻を見舞った時、同行していた兼愛園の保母の時実正子が部屋の清掃中に子供の位牌を見つけて愕然とする。芝を送ったその足で、青木は時実正子を連れて食事に行き、その後またも暴力で凌辱してしまう。時実正子がかつて駐留軍兵士に暴行されたというおぞましい過去を持ち、いまは施設で栄養士として働いている女性である。その後、彼は内輪の祝賀会に出て、宴席で職員たちに向かって、現在の施設を混血児収容所から精神薄弱児童収容の施設へ徐々に変えて行きたい趣旨の言葉を述べる。そのあと、ふたたび待っている時実正子のところに戻り、新聞社から兼愛園に副賞としてもらった二百万のうち三十万を生活費としてあっさりと与えてしまう。

第三章も舞台は兼愛園で、その日、子供向けのテレビ番組を見ながら、「見せしめの人生」ということをしきりに考え、自分の死の造型を探し始める。すると職員の中でも最も鮮烈な思想をもつ中里徳雄が水谷久江の同席する場で、青木が新聞社からもらった報奨金を流用していること、また「温泉マーク」に入っていくところを見た職員もいると、水谷久江、時実正子との関係を暴露する。そしてこれに青木が答えないので、自分はここを辞めるといふ。革命は道德の革命を伴わなければ成就しないといった議論をする。青木は、辞めるよりも園長排斥運動を起こすべきだと主張する。青木はその後、アパートに住むことになった時実正子を訪ねるが、そこへ水谷久江が乗り込んできて、諍いを起こす。そこで青木は二人の女性に「嗚咽するような声をあげておどろかかって」いく。墮落に突き進む描写がただ無表情的に重ねられていく。五二歳の中年男性にし

てはやや信じられない行為であり、最終章にあるチンピラ殺傷事件と同様、戯画的な印象が否めない。

ふたたび舞台は兼愛園に移る。孤児のヘンリーが小鳥の死骸を埋めようと泣きながら土を掘っている。そこを通りかかった青木は「この柵から外へ出てはいけない」という。それでも彼はこの数日間の「転落」を自認し続ける。それは過去に遡行しようとする甘美な誘惑でもあった。

どうして新聞社の事業部は兼愛園に社会福祉事業賞などをあたえたのだろうか、と青木は思った。そして、どうして自分もまた、のこのこ表彰式へ出向いていったのだろうか。彼もまたこの柵から外へ出なければ生涯を平穩に暮らせたかもしれないのだ。

そう、何も求めなければ、平穩な生活が保障されていた。だが、一旦、欲望が顔を覗かせるや、それに抗うように過去の亡霊たちが付きまとうのだ。過去の幻影をみてしまった青木は、もはや正常な生活者ではなく、ひたすら存在否定の逃避に駆られていく。深夜こっそりと兼愛園に忍び込み、設立当初の趣旨説明書などの書類を焼こうとする。そこでもまた蠟のような涙を流す。頻繁な鳴咽、泥酔だけが遣り場のない青木の心象風景のように挿入され、そこに至る、あるいはそこから放たれる精神の傷口が緻密に描かれることはない。

怒りが必要だった。いや、正義にもとづく怒りの感情が必要だった。実際に兼愛園が炎とともに消滅するためには、エホバのような怒りが必要だった。だが、二年間のシベリアの捕虜生活で、彼は正しき怒りの感情を失ってしまった。奴隷には正義も怒りも不要だった。奴隷が余計な感情を懷けば、それはすなわち死だった。彼は生きのびるために、感情と思惟のある部分を麻痺させた。いや麻痺というより切断とすべきだろうか。

青木が繰り返す「怒りの感情」とは何か。それは戦後の日本に対する怒りであり、「翻身」した自らの欺瞞への怒りであった。

だが、ここには虚弱化した感傷が疼いているだけである。第四章では、思いもよらず妊娠した時実正子が産婦人科で中絶するのを見届けたのち、青木は金も支払わずに報奨金の残りを持ち逃げして失踪する。競輪場で金を使い果たすこともなく、場末の酒場を転々とする。そこで、ラジオから流れるニュースで、満洲国時代の旧友による幻のクーデターの発覚を耳にする。果たされなかった野望の顛末に、彼は高笑いをする。そして酔いつぶれたあぐれ路上でチンピラに囲まれ、所持金を巻き上げられそうになる。危機感を感じた青木は「見ておけ、本当に人を殺すのはこういうものよ」と叫びながら、授賞式以来彼の身邊につきまといいた黄色のビニール傘で無法者を次々と刺していく。

甘やかされた若造ども……ちやちな反抗に自己満足している貴様らになにができるか。平和に飼いならされた柵の中の豚どもに、人ひとり本当に殺せるか……

この黄色のビニール傘は第一章から最終章までしばしば登場するが、これこそが緻密に計算された作品の暗喩であり、彼の内面の奥底にずっと潜んでいた満洲国の幻影、化身であり、果たされなかった志の残滓であつた<sup>注⑥</sup>。

最後の場面は、未決監の刑務所で青木が水谷久江と中里徳雄が面会する場面である。青木は自分がいなくなったあとの事業の運営を二人に任せたいと頼む。中里は唯一青木と対抗しうる登場人物で、作者も主人公も中里に未来を託す言辭を書き連ねる。「すべての道徳を失った者の最後の奉仕としての、〈見せしめの人生〉」……。閉ざされた面会室の扉を振り返り、心中「どうだね。これでいいのかね。水谷君」と水谷久江に呼びか

ける。青木は自分を裁くものは国家であることこそ望ましい、と呟く。本作品のクライマックスであり、しばしば作品の解説にも引用される象徴的な科白である。日本人であるあなた方にこそ裁かれたかったのだ、と――。

だが、私は主張する。私を裁くものは国家であることこそ望ましいと。宗教でもなく、良心でもなく、道徳でもなく、この東方の小島の上に君臨する権力、一たび世界性を持つとうとし、もろくもついていた国家であるべきだと。なぜなら、私の青春のすべては文字通り、幻の国の建設に捧げられたのだから。

そう、私は、私たちは、わずか十数年の命運しかもたなかったけれども、この地球上に一つの国家を造ろうとしたのだ。彫刻のように半永久的に保存される命数もなかった。絵画のような色彩の華やかさもなかった。しかし、私は、政治を毛嫌いするいかなる科学者や芸術家にもまして現代を生きた。奢れるものは久しからずの喩え通り、それはつかの間に滅びたけれども、いかなる王道、いかなる仁政もまた、それに先行する霸道の上にしか築かれない。いずれは滅びるものとしてのその霸道に私は荷担し参与した。さあ裁いてみよ。国家を建設するとい



吉林省・長春に残る「偽皇宮博物院」(「偽満宮」)

うことがどういふことか、国家とは何であるか、あなた方に解っているなら、裁いてみよ。国家の名において裁いてみよ……

そして最後に満洲で二人の子どもを見棄てて逃亡した悲劇がはじめて明らかにされる。青木隆造のこうした感情の発露は飛躍的な感情の自縛が否めないが、この終結は作品の総括でもあり、青木隆造の自己解体でもある。この姿勢は高橋晩年の思索「わが解体」「暗黒への出発」へと連なっていく感情母胎でもあった。かくて太田代志朗は作品を次のように総括する<sup>注⑥</sup>。

ポツダム宣言の受諾と占領によつてははじめられた戦後平和と民主主義は、戦前の大東亜共栄圏をただ葬られるべき軍国主義とファシズム体制として、無責任な指導者の責任をことごとく回避した。こうした戦後の虚偽と欺瞞は、いまこそ暴かれねばならぬ。青木隆造の絶対化され、美化された幻の国家によつてこそ、みずからは呪詛され、憎悪されなければならない。それは戦後文学の担い手として登場しながら、めくるめく日本の情念を噴出させた高橋和巳の葛藤そのものであった。

#### 四、主題の重層性

ここで、副題にある「あるいは内なる曠野」という表現について少し言及しておきたい。小説の題名に論文のごとく副題を付することは少なくとも慣例ではない。この「あるいは」という接続詞は、「墮落」と断定しきれない内面の不確実性をあらわし、また「内なる」はしばしば「わが内なる」という定型化（「わが内なるオキナワ、ベトナム、……」などのように）によつて、自己矛盾の苦渋を内包している。さらに、「曠野」は満洲の曠野であるとともに、戦後日本における日本人の荒涼とした精神でもあった。こうした「あるいは」「内なる」「曠野」という三つの表象が主人公の苦悶と重なっている。こうした題名の計算は作者の想念と密接なつながりがある。そもそも「満洲国」という傀儡国家は、王道楽土、五族協和を表向きは掲げながらも、日本を中心とする霸道国家体制であった。当時の社会風潮は関東大震災や世界恐慌、農村社会の疲弊の打開策として「満洲」という沃野があったのである。たとえば当時の日本人の「満洲」に向けられる視線とは次のようなものであった。

ここでわれわれは、国内から外部へと眼を転換しなければならない。満蒙の沃野を見よ。（中略）他人のものを失敬するのは褒めたことではないけれども、生きるか死ぬかという時には背に腹はかえられないから、あの満蒙の沃野を頂戴しようではないか<sup>注⑦</sup>。（傍点、引用者）

あるいは、満洲国建国十周年を記念して書かれた『満洲建国側面史』（昭和十七年）では次のように書かれている。

「大陸統治の要諦をかく見る」

…結論めいた私の感想を述べると、私が満洲を知り支那全体を見て考えたことは、なにしろ支那は大きくて、一遍に支那を片づけてやろうなんてことは無理だということだ。それは戦闘は勝つに違いないが、建設というものは一遍にできるものじゃない。建設を伴う解決方法を握って考えなければならぬ。第一は満洲、第二が蒙疆を含んだ北支、第三が中支、第四が南支、第五が西北支那と分けて考えて見ても、その一つを完全に建設するには少なくとも十年はかかる。そうすると、支那を本当に建設するには少なくとも五十年を要する。これは順調に行った場合で、いろいろ国際情勢に変化も起ろうから、まず倍とみて百年掛ると思わなければならぬ。そういうふうな物を考えて、準備して行つて、無駄のないように一つ一つ徹底的に解決して行くことが必要であると私は考えている。

…それから満洲国の産業開発の問題だが、私は満洲はまず第一に日本の食糧の給源にすべきだという考えをもっている。日本が今後どこで何をやろうと、日本に最も近接した大陸に大きな食糧の給源をもつということが絶対に必要である。満洲をこれにする。従つて満洲の開発の重点はまず農牧の開発に置き、鉄とか石炭という問題はこれと並行してやるべきものである<sup>注⑤</sup>。（傍点、引用者）

これが当時の日本の北の生命線、満洲国建国の本音であつた。だが、占領統治される側は圧迫された屈辱の時代であつた。建国は侵略と表裏一体であつた。たとえば、吉林省省都の長春は満洲国時代は国都が置かれ新京と称されたが、現在も市内に当時の関東軍の施設などが残されている。その一つに「偽満皇宫博物院」という、日本の皇居を模した建物がある。当時の日本ファシズムを象徴する遺産として一般に開放され、隣接敷地には「東北淪陷史陳列館」の施設もある。「博物院」入口には中国語、英語のほか、日本語でも記されている。

偽満皇宫は長春市光復北路五号に位置し、敷地面積が十三・七万平方メートルです。ここは清朝末代皇帝愛新覺羅溥儀が偽満州国傀儡皇帝を担任する時に住んだ宮殿の遺跡だったし、また日本が武力で中国東北を侵略し、偽満洲国をでつちあげ、ファシズム植民地支配を推し進めた歴史的な証です。（以下省略。原文のまま転記）

敷地には緝熙楼、勤民楼、同徳殿があり、当時の状況が復元されている。緝熙楼正面の大きな石碑には「勿忘九一八」という文字が江澤民によつ

て書かれている。館内の説明掲示板にもなぜこういう不幸な歴史を経なければならなかったのかを考えてみようという一文がある。建物内部には日満議定書を調印した執務室も保存され、さらには東御苑、乗馬場、プール、また建国神廟の一部遺跡や防空壕まで残されている。この空間には徹底して、侵略者としての日本が記憶されているのである。

さて、『墮落』は「なぜ涙を流したのか」という暗黙の問いかけによって始まった。この失墜、破綻の序章は遺作となった『白く塗りたる墓』の冒頭（「突如声を失ってしまったのだった」）にも継承されている。報道番組の担当者である主人公の三崎省吾が番組収録中に突如、声を失ってしまうのだ。いずれも公の場で自らを制御しえなくなった苦悶が象徴されている。また、青木隆造の失踪についても、『黄昏の橋』における主人公、時枝正和が姉の結婚式に遅れたり、また気がつけばふらりと違う列車に乗ってみたりする自棄的な性格との類型化が見られるが、高橋和巳の主題のひとつである知識人の解体、自己破滅という点では青木隆造がもつとも象徴的であるといえよう。

ところで作品には混血児の存在が重要である。この設定には伏線がある。高橋和巳は当時の座談会で次のように述べている<sup>注⑩</sup>。

僕も大阪に帰って、それから松江は焼けないというので、松江の高等学校を受けたのです。ごく古い、小京都のような町がそのまま残っているのですが、そこに混血児を抱いた女の子がいて、なんとなく威張っているのだな。それはシヨックだったですね。なにか昂然として混血児を抱いて歩いているのですね。（中略）

町全体が焼け跡で混乱している。そこを進駐軍の兵士が歩いていても、あまりそうは感じないが、日本の昔からの古風な家並みのあるところにヒヨコツと混血児がいたり、進駐軍がなんとなく威張っていると、シヨックだったんですね。

そしてこの混血児に対する青木の感情も一元的ではない。満洲には残留日本人孤児の問題が残されていたにもかかわらず、それをモチーフとして扱わず、満洲国が五族協和として掲げた民族融合の陰面を米国人との混血児問題にあえて置き換えたわけだが、そこには資金調達の際にアメリカ人に対して、「……これらの子供たちを見棄てておいて生涯アメリカを憎みつづける人間に育てたいか」といった青木隆造の正義の怒りがあった（第一章2節）。この怒りは敗戦、アメリカへの怒りであり、第四章で呟く青木自身の原点から逸脱した戦後存在への怒りであった。

アメリカに、混血児を受け入れる新しい移民法ができたのも、ドイツその他に駐留していたアメリカ兵とヨーロッパ女性との間の子供のことが問題になってからのことである。黄色人種との海外混血児の問題は、国家も教会も懸命にそれを伏せつづけた。ドイツを降服させるため

には原爆を使わず、もう一押しでついえ去る日本の広島と長崎で、それを試みてみたのと同じ精神がそこにも生きていた。  
むらむらと燃えあがる怒り――。

さらに、原爆に対する作者の関心は、同時期に書かれた『憂鬱なる党派』の主題でもあり、また高橋自身、知人の原爆症による自殺から大きな影響を受けていたことが知られている<sup>注⑩</sup>。そうした背景が彼に次のようなイメージを定させたのも自然なことであった。

華やかなイルミネーションに輝く都市建築や、図表化されうる生産と消費水準の上昇だけが文化の指標ではない。文化は人の生活の内に入り、心の内にある。それゆえに一民族の文化は、その繁栄において自らをあらわすだけではなく人々の苦難の生活を通してまた自らを開示する。(中略)

たとえばここに一人の原爆症に悩む少女がいて、千羽の折鶴にありえない回復の祈願をこめて一つ一つ色紙を折っていったとする。その色紙は、廃墟の町が整備されて貫かれるアスファルトの道路のようにには有効性はもたない。不可避的な少女の死とともにその折鶴もやがて色あせるであろう。彼女の作ったものはピラミッドのように堅固でも永遠でもない。しかしなおそれは都市の整備や復興と同じウエイトをもつ人間のいとなみなのである。なぜならその折鶴もまた一つの〈文化〉――つまりは人間が人間的に生きたことの一つの証しだからである。

(「孤立無援の思想」)

繁栄によって失われたもの。原罪とは何か。それを高橋和巳は満洲国とそこに生きた人物をモチーフとして描いたのである。そして満洲国が滅びたように、理想をもつ〈篤志家〉もまたその地で墮胎された以上は、破滅し、墮落し、滅亡するほかなかったのである。

## 五、〈理想〉の悲劇性について

『墮落』が文芸誌に発表された当時、一定の評価を認めながらも、作品のもつ主題の壮大さから、これを時代に見合った規模に拡張し、さらに十五年戦争の贖罪を明確に織り込む必然性が批評の大勢を占めたが、作品は大きな修正をほどこされることなく、発表から四年の歳月を経て一九六九年二月に単行本として上梓された。作者は「あとがき」で戦後日本の時代状況を次のように記している。

太平洋戦争の敗戦を〈終戦〉と言いかえたときから、考え尽すべき多くの問題が、抑圧されあるいは単に忘却してすまされることとなったが、その半ば無意識に忘却されようとしたもののうち、もつとも重大なものの一つは、幻の帝国——満洲国の建国とその崩壊である。

私見によれば、それこそが明治維新らしいの日本民族の物理的エネルギーから精神構造にいたるまでの、活力と矛盾、夢想と悲願の集約であつて、この体験と苦渋、独善と錯誤を伏せてはいかなる未来志向もありえない。

作者はここでこの作品にこめられた意味を再確認する。こうした認識は高橋自身の戦後責任論であつた。さらに続けて言う。

だが、あたかも敗戦直後の小中学校の教科書が、都合の悪い部分を墨で消して、直輸入された政治的観念を接種することで一時を糊塗したように、この満洲国のことも単に記憶から、あるいは歴史の記述から抹殺されたにすぎなかった。一時の異常事、一時の異常志向として、まがりなりにも平和な日常性を獲得できた戦後の世界とは無縁のものとみなしたのである。残念ながら、過去の蹉跎を切断することによって現在の苟安をむさぼろうとするのが戦後を主導した日本人の態度であつた。

だが、私は強くその態度を嫌悪する。

ここには戦後精神への懷疑と批判が厳存する。何の反省もなしえず、平和の安逸を貪る国家・国民体質こそが糾弾されるべき形骸であつた。そのもつとも根源的たるものが満洲国であつた。ところで、高橋和巳の廃墟のイメージは『非の器』（一九六二）の「初版あとがき」に次のように述べられている内容と軌を一にしている。「廃墟」とは作者にとって創造する意志の地下鉅脈にほかならなかつた。

私も文筆を業とする以上は、すべての青年がひとしくかくあらんことを欲し、そこに描かれた真実によつて、また照りかえして内なる真善を自覚するにいたるような、大肯定文学を構築しうればと夢想する。しかし残念ながら、この作品がそうであるように、さらに一層、重く暗い物語を書き続けてしまいそうな予感がする。それはあたかも、少年期に、都市全体が焼けつくした廃墟に立ち、同時に人々の内なる荒廃をもみてしまったために、のちに華麗な街々の装飾をみても、背後にはなお廃墟が広がっているのだと思ひ込んでしまう不幸な意識ににている。そうである。どうやら私たちはなお廃墟に面して立っている。（傍点、引用者）

ここで「内なる」を二度も使用し、共感を投げかける内には、「大肯定文学」への志向を前提とせんがためであった。そして文中にも現れる「廃墟」は、人間の荒廃の棲家としての廃墟でもあったのだ。さらに長編『憂鬱なる党派』の冒頭にある、主人公西村恒一の次のような呟きにも、作者の志向の始原が描かれている。

中学生のころ敗戦にあつてから、彼は自分の感覚を越えた理論体系や膨大な仮説を、そして権威ありげなものの一切を信じなくなつてゐた。敗戦と、それがどのように関係するのか、よく解らない。しかし、錯綜し複雑に入りまじつてゐるものを、目の前でたちまちに整理してみせる精神の魔術は、彼には常に許しがたい不誠実のように感じられた。それは才能に恵まれなかつたからではなく、記憶以上のものとして今も彼を支配している或る経験のせいだった。あまりにも急激な価値変動を何度も経験しすぎたのだ。それは、おそらく彼だけの経験ではなかつた。そして、あの閃光も彼の頭上にだけ花咲き散つたのではなかつた。人々は同様に教育され、感激し、疑惑し、そして不意に崩れ去つたのだから。(傍点、引用者)

現実を見てしまったがゆえのある種のトラウマは、現実が非現実的なものを犠牲にして、幻想によつて築かれた「負の遺産」であることを悟る。そして、この廃墟は次の〈理想の悲劇性〉へと連関する。

第一章の5節で青木隆造は昨夜の水谷久江を凌辱したあと、一人旧友の墓参をする。この間の心情の振幅は同じ主人公とは思えないほどの隔たりに見せている。その旧友はもと関東軍下士官。彼は小さな善意に駆られて野外演習のたびに部下の小隊をひきいて満洲人部落の農耕の手助けをした。満洲国建国当時、また日本人移民の当初には、まだ牧歌的な光景があり、部隊のそうした行為も許容される雰囲気があつたという。だが、この下士官の「愚かな非政治的善意」がやがて匪賊の襲撃による小隊の全滅という事態をもたらす。作品の主題である「理想の悲劇性」はそもそもここに帰趨されるといつてよい。善意なるものの曲解、破綻。そして善意なるがゆえの非現実性――。

何が間違つてゐたのか。軍人として義務づけられていた粹をはみださねばよかつたのか。それとも農耕の手助けをするという行為自体が、土着の民にはやがてその土地を没収される前触れと映つたのか。いや、おそらく、彼がなにかある理想を胸にいだいたこと、それが彼を滅ぼしたのだ。人が滅びるのは、自堕落によつてではない。むしろそう、その人間を勇気づける理想によつてなのだ。(傍点、原文)

満洲帰りの者にはさまざまな苦渋があっても差別化は避けられない。恩給をもらうために奔走する者もいれば、この下士官のように忘れ去られた理想も実在した。その「ある理想」とは何だったのか。その内実は当人にしか分からない。青木にもまた「理想」があった。この「理想」については、同じく第一章の1節では〈理想〉が、悪夢のように蘇える。表彰をまつあいだ、青木隆造は司会者の語る紹介文に登場する「理想」という一語に囚われる。あれは果して、「理想」であつたのか。王道楽土の理想実現、青年の理想……。水差しから水をくもうとして、コップに小さな埃があたかも蠅の屍骸のように浮んで見えたとき、彼の視界には曠野が広がっていく。

そして司会者の鄭重さが、満洲といういまは虚、空に消えた国名と、彼の人柄をたたえるために〈理想〉という言葉とを不用意に結びつけたとき、彼の内部に見極めがたい曠野のイメージと、喪った時間の痛みとが隠微な軋み音をたてた。

自己内部の成長としての〈理想〉、そしてその外側を圍繞する対象世界、満洲国という〈理想〉。この二つの理想の間に挟まれて翻弄された結果、青木には理想という言葉はむしろ形骸化したものでしかない。〈善意〉は〈理想〉と同義語ではない。ところが〈理想〉（あるいは〈理想主義〉）は往々にして他者からは正反対に映ることがある。農村奉仕という善意は当地の習慣からすれば馴染み薄いものであるし、むしろ、将来この土地を盗られるのではないか、という恐怖感、危機感を募らせこそすれ、正直に感謝するということはない。それこそ、日本人の側から見た都合のよい打算なのだ。異文化の恐怖感覚。せつかくの善意が土着の民には侵略行為と結びついて猜疑されることは十分考えられる。

高井有一の『時の潮』という作品に満洲帰りの瓜生昌良という七十八歳の男性が登場する。瓜生はかつて満映で撮影の仕事をしていたのだが、戦後は会社経営、現在は引退して若い女性と余生を送っている。満洲国時代の体験をインタビューに答えて語る場面である。

わたしは岩手の百姓の出だから、日本の農村の貧しさも骨身に沁みてるが、それすら満人の貧しさとは較べものにならない。生活環境も痛ましい。苦労の第一は水なんだ。（中略）わたしが初めて巡回班に加はつて出掛けた先は、新京から西北へ二十キロ余り入った村。わたしが泊めてもらつた農家には、子供が男ばかり三人ゐただけど、何箇月も身体を洗はないらしくて、全身泥と垢で真黒けなんだな。ちようど少し暇があつたもので、わたしはこの子等に行水をさせてやりたくなつてね、わたしより若い相棒に手伝はせて、歩いて二十分もかかる川から荷車で水を運んで来て、一人ずつ順番に洗つてやつた。子供はきやつきやつとはしやいだし、私も楽しかったよ。すっかり白く可愛い顔になつたのを見て、何だ、日本人の子と変らないじやないか、なんて思つた。甘かつたんだね。三人目の、三歳くらいの子を裸にして、頭から水

をかぶせたとき、どこかへ出掛けていた母親が帰ってきたんだ。わたしは、どうです、見違えたでせう、といふつもりで、笑顔を向けたやうな気がする。ところが母親の反応は、甘ちゃんのわれわれが予想したやうなものじゃなかった。すさまじい形相をして、わたしから裸の子供を奪ひ取つて、大声で叫び出した。わたしは呆氣にとられて、子供の身体から、水滴が母親の足の甲に滴り落ちるのを見てゐるしかなかった。相棒は、多少は満語が出来たんだが、彼にも子供に触るな、出て行け、と喚いている事くらゐしか解らない。弁解のしようもない。這々の体で逃げ出して、その夜は野宿。蚊の大群に攻められて一晩中眠れなかった。ひどい目に遭ひましたよ」(原文のまま)

この話を聞いた「私」は母親が誤解したのか、と聞き返すと、瓜生は確かに子供を攫われるとでも勘違いしたのか、と思ったが、本当は誤解や勘違いなどではないという事が、満洲で暮らすうちに解つて来たという。それは「日本人への恐怖感」だという。

満人にしてみれば、日本人は闖入者だからね。格別迫害されなくても、何をされるか判らないといふ恐怖感を抱ひたのは、考へてみれば当然だ。自分の子供が日本人に裸にされて、水をかぶせられてゐるのを見て、その恐怖が爆発したのも無理はない。攫はれると勘違いしたんじゃないくて、もつと本能的な恐怖に駆られたんだな。さういふ満人の恐怖感に、日本人は無智でしたね。わたしもあつちこつちで壁に頭をぶつけたあげく、やうやく氣付いた始末だつたが、最後まで無智な者も大勢いたよ。恐怖はそれが高まると憎しみに変るんです。だからこそ日本人は、敗戦後にあれほど悲惨な目に遭はなくてはならなかった。(同、傍点、引用者)

異民族の興亡の歴史に生きてきた民衆にとって、そうした恐怖感とは本能的なものであつた。均質的思考を前提とする日本民族にはそれが分からない。それに加えて、人間には無目的な善意というものがある。だが、それはときとして善意者を破滅に追いやる。純粹培養に慣れ親しんだ日本人には体験しえない感情である。この悲劇性は作品のなかでさらに追認されるべきモチーフであつた。

## 六、創作と想像力との相関

およそ文学作品には作者の感情が作中人物、とりわけ主人公の心情に投影されるのは必然的なことである。『墮落』は主人公の感情の発露から始まり、終結にいたっているが、この間の時間経過も回想と現実を青木隆造の述懐で語られる。しかし、これは後日に起こされた手記の形式ではない。あくまで、視点は現実にある。通常、一人称か「彼」という三人称で描かれる主人公が、『墮落』では作者の解説と重複させながら進行す

るという技法を用いている。こうした〈語り〉の手法に関して野間宏は次のように述べている<sup>注⑧</sup>。

……それが語りという風に見えるのは、決してそれを読みすすめている時ではなく、これを読みおわってからのことである。〈語り〉は従来の語りのようにただ過去から現在へそれから未来へという風にのびているのではなく、現在から過去へ、過去から未来へとのびることのできる新しい〈語り口〉による〈語り〉なのである。そしてその語り口は過去をよく現在からかくし未来からかくす術をそなえている。そして描写さえもそのうちに包含し、描写を語りの描写とみせず、描写の描写とみせる術をそなえている。しかしそれが語りであることにはちがいないところであって、ひとはそれを終わったとき、はじめて一つの物語が語りおわられたことをはつきりとさとるにいたるのである。

まことに要を得た観察であるが、この手法は恣意的、意識的なものであろうか。勢い、社会的歴史的素材を文学のモチーフとすれば時代背景なりを解説する要請があるのは否めない。いわば外側にある時代史と人間の内側にある時代史を並走させるとなると、前者のなかに後者をどう位置づけるのか、という工夫が生じる。作者はそこで評論的な語りを援用する。高橋和巳の作品の多くがこうした語りの構成になっているが、その結果、冒頭部分が全体を象徴し、「語りは始める時にすでにその終りをよく知っている」のであり、或いはさらにいえば「その終りを知っているがように語る」のである。そして、読み手はあたかも作品の主題が自らに課せられたかのような重い感慨を抱かされることになる。

小説の主人公をいかに「鑄造」するか。これは長編小説を指向する作家にとって命綱のようなものであろう。高橋和巳の作品に登場する人物は『非の器』の正木典膳であり、『日本の悪霊』の村瀬狷輔であり、作品の中軸的な役割を付与される。それと同時にオムニバス風に複数の主体的な人物も配置される。その結果、全体としては「群像」の印象を否めない。これは日本の伝統的な私小説の枠を打ち破ることを敢えて意図したもののよう感じられる。青木隆造という人物像も時代の化身であり、過去から現在に産み落とされた棄子の存在である。同時に青木という存在はその一人によって構成されているのではなく、周辺のたとえば水谷久江、中里徳雄という人物群によって際立つことになる。こうした人物構成ないし、配置に関して、筆者は一人の画家の転折を想起する。

洋画家小磯良平（一九〇三―一九八八）は西欧に留学した際にもっとも衝撃を受けたのは夥しい人物の描写であったという。帰国後、彼は「斉唱」、「娘子関を行く」などの作品において「群像」を描くことを実践する。この場合、注意すべき点として人物の視線は水平に捉えられ、足元は上部から俯瞰する角度から描かれている。こうした一見矛盾する立体的な描写は小説の作法にも反映されるものであろう。すなわち、高橋和巳の意図は人物を水平描写しながら、社会なり時代背景を俯瞰描写することによって横軸と縦軸の交差を意識したと思われる。夥しいディテールの積



吉林省・長春に残る満洲国國務院・関東軍司令部跡

み重ねがあたかも複数色の重ね塗りのように画布を構成していくことは、同時に戦後という時代を複数の視点から検証し直すことにほかならなかった。同一人物にしても複数配置することによって、空間的時間的な立体感を描出しようとしたのである。

この〈語り〉の象徴ともなる部分が、おそらく最後の青木隆造が追想する二人の子どもの最期である。敗戦直後、青木は開拓団を見捨て、妻を捨てて、二人の子を連れて逃亡した。この設定は、ソ連軍侵攻の際、民衆を守るはずの関東軍がいちはやく日本に撤退するという構図の象徴にはかならない。さらに、青木は破壊されずに残った橋梁を渡るとき、二人の子どもを先に行かせて敵弾が飛んでくるかどうかを確認する。いわば自己保全の盾のように子どもを見立てているところに、戦後日本の過去との関係性を象徴させようとした。青木に子どもを見殺しにさせたもの、またそのことが妻の精神の異常をもたらししたこと、それは青木をはじめ無数と言ってよい無辜の人民を阿鼻狂乱の世界におきざりにした国家であった。国家は民衆を裏切り、戦後の為政者はひたすら安逸を貪った。伊藤益はこの国家と個の関係を次のように解読する<sup>注③</sup>。

……作者は、極限状況における青木と二人の子どもたちとの関係を、ひいては、そこに裸出する人間性の底部の情緒を際立たせることによって、「国家」や「イデオロギー」といった観念によって織り成される社会的で表層的な営みを超えた根源的な何かを模索しようとしている。その模索は、作者自身がとり立てて尖鋭的に意識化するところとはなっていない。だが、二人の女性を犯す直前に極限状況下での親子の故事を語り、さらに終局部で青木をめぐる親子関係の「真実」が露呈されるという結構は、『墮落』という作品が、作者の意図をはるかに超えて、人間性の深淵にまで迫る作品となりえていることを、如実に示している。

人間存在の根源悪はだれにでも潜在する。その象徴を作者は新版のあとがきの末尾に述べている。ドッペルゲンガー、即ち分身、あるいは自身を自分で透視する幻覚対象として。

いやむしろ、いまもお、この主人公は、私であり、あなた方であると言いうる倨傲を敢てしたいと思っている。この作中の主人公は、いまは一つの暗い影、過去の亡霊にすぎないと思われるかもしれない。しかし、いま平和を享受する人々もまた例外なく一種のドッペルゲン

ガーであり、そのもう一つの影の存在はおそらく、この作中人物の姿に酷似しているはずだと私は思う。

一方、作品の構想が外面と内面から構築されとなると、その時代に生きる人間の心情的な描写が交錯する。そうすると、作中人物の関心に見合った素材だけが修飾され、本質的なものが捨象されてしまう危険性も回避できない。作品に見られる構想力の一方で、歴史的な記述の素描が印象に残るのはいわば必然的なことでもあろう。それは満洲国に関する記述にその視点の欠落を見ることが出来る。青木隆造は祝賀会のあと、旧知の人間たちと再会した際、「わずか十三年間の夢だったわけだ」と回顧する元参謀の言葉に、次のような感慨をいだく場面がある。

一つの国家が造りあげられ、そして滅びた。われわれの計画が仮りに採用されていたとしても、やはりあの国は滅びねばならなかった――

満洲の曠野に過去の「バベルの塔」を築くことに抵抗がないわけではなかった。この「なければならなかった」という述懐は最初から運命共同体として配偶されていたが、近い将来において満洲国の受けるであろう叛逆と暴虐の制裁はすでに日常においても感知されていたのだ。たとえば執務室で憔悴した顔を突き合わせながら、滿蒙政權構想を、さらには国家建設の草案を練っていた日々のなかでの感慨。

これが国家を築くことなのか、とそのころ幾度も青木は疑った。窓の外に存在する村落、そして無限の雪と空――。その無限の拡がりを超えて切るのは一体何なのか。万里の長城すら区切りえぬ大地を、この机上の秘密な計画によって果して区切りうるだろうか。

それはあまりにも不遜で遠大な構想であり、現地居留民の日常の感情を排除したものにはかならなかった。しかし、これだけの記述ではあまりにも満洲国の実態の記述は粗雑であると言わざるを得ない。満洲青年同盟にしてもそれが協和会とどのような関係にあったのか、日本の官僚の満洲国役人への還流、また建国大学などの人材養成機関の実態なども織り込むことも可能であったはずである。屯墾病にしても滿蒙開拓義勇団（滿蒙開拓青少年義勇軍）にしても名称ばかりを書き連ねて実態が描かれていない。混血のことを持ちだすならば「大陸の花嫁」についても言及すべきであった。さらに、王道を掲げる裏で侵略の版図を広げていった日本軍の罪行については何一つ描かれていない。例えば橘外男（一八九四―一九五九年）は一九三八年に満洲に渡り、書籍配給会社に勤めたが、当時の体験を戦後独特の文体で作品を残している<sup>注④</sup>。



帝国日本の侵略の象徴・「七三一部隊」遺跡

「右に見ゆるは国務院！ 左に聳ゆるは合同法が！ オーライ、オーライ！ ストップ、ストップ！ では皆様！ 遙かに見ゆるあの建物は……遠くこれを眺むれば牡丹に戯るる唐獅子か、近くに寄つて眺むれば、菜の花に集う胡蝶の群れか、とも見えますものはあれは何でございましょうか？ これぞ将来は東亜の興隆を双肩に担つて立たんとする意気燃ゆる六百の若人が孜々として勉強弛みもない建国大学の屋根でございませう！」というあたりに至つてはいくら冷汗を流しても流し甲斐のないことであつたから私の脇の下の汗は止つてしまった。

こうした虚飾燦然たる形容にも満洲国の実態があつたのであり、『墮落』にはこうした虚構としての真実が描写されるべきであつた。

## 七、「満洲国」と日本人、および日本の情念

日本人の大陸進出はまず、満洲、満蒙の地固めから始まつた。「満蒙の沃野を頂戴しようではないか」——こうした煽動が国家的野心となつて膨張し、戦争の論理を高めて行くのだが、背後には世界恐慌、関東大震災、農村の疲弊などによつてもたらされた危機感を打開する策として、満洲に目が向けられた。当時の偽らざる証言である。

近年、「満洲国」に関する研究が盛んである<sup>注⑩</sup>。大連など東北部沿海州をはじめ日本との産業連携もめざましい。これらの現象をもつて、戦前戦中の「満洲国」との繋がりを意識する日本人も少なくはないだろう。戦後の合理的な経営思想、また、戦後の日本のレジームが満洲国の遺産を引き継いでいることもしばしば言及される。だが、これらの観点は一元的としかいえない。松村高夫は侵略の象徴である「七三一部隊」の罪行にふれながら次のように述べている<sup>注⑪</sup>。

この七三一というのは、日本の満洲（中国東北）侵略の最も象徴的な出来事です。ところが、最近の「満洲国」論、これは一種のブームになっていますが、満洲、満洲のことが本になつて出ています。これからも続くと思います。ただ、そのなかで議論されていることは、満洲の経営、あるいは満鉄経営、これが非常に合理的な経営だったということを前面に出す研究がほとんどなんです。あるいは戦後の合理的な経営を先取りしたのが満洲、満鉄であつたとか。でもこうした議論は肝心な点が抜けている。大前提がもう違っているわけです。

……ある村で八五歳くらいの老人がこう話しています。日本軍が入って来て、彼はそのとき少年だったんですが、物陰から中国人が拷問されているところを見たり、殺された跡を見たりしたというんです。いつごろのことですか、と訊ねると、何年とかいうことは勿論頭に残っていません。ただ、何歳ぐらいのときだったとか、こういうときだったか言います。それはちょうど日本が満洲を侵略した一九三一年、その直後なんです。満洲支配というのは、そういう虐殺をしていく、侵略をしていくことであり、そして翌年、満洲国をつくっていくという事なのです。最近の満洲、満洲国に関する研究は、そうした事実を完全に欠落させています。

しばしば「満洲」が郷愁（ノスタルジア）によって語られ、あるいは学問的にはポストモダン、植民地近代化論というかたちで語られるとき、根本的なことが脱落する。帝国と植民地、支配と被支配の関係を揺るがせることはできない。事実として、日本が植民地として支配し、収奪し、虐殺を行った事実を直視しなければならない。にもかかわらず、被害意識と回憶の感傷によって、また事象のみの関心によって満洲国という虚構の国家の成立とその過程で繰り広げられたさまざまな罪行を戦後の日本人は総体的に受け止める勇氣をもたなかった。一方、個々の「崇高」な志を抱いた青年たちもいたことも確かである。城山三郎『草原の敵』には初年兵として国境近くに配属されてくる田村という人物を描いている<sup>注⑧</sup>。彼らは次のような歌に象徴される、純粋な時代の志向性を抱かされていた。

戦争する身は かねてから

すてる覚悟で いるものを

泣いてくれるな 草の虫

東洋平和の ためならば

なんで命が 惜しかろう

〔露営の歌〕作詞 藪内喜一郎

そこへ建国大学の予科から繰上げ入営させられた長谷部二等兵が中国人の前で流暢な中国語で東洋平和、五族協和を謳った歌を歌い、喝采をあげるが、本心は複雑であった。やがて侵攻するソ連軍と対峙し、決死を前に彼は言う。

僕は別に満洲国で出世しようと思って、こちらの大学にはいったわけではありません。満洲を、そう、あなたの言う東洋平和のための楽

土にしよう、そのための石をまちがいなく積み上げて行く一人になろうと思って……。だが、やってきてみて、満洲国というものがわからなくなりました。日本で考えていたことと現実があまりにもちがひ過ぎて。……ただ失望はしましたが、ぼくは日本へは帰れませんし、帰りません。満洲を死に場にきめて出てきたのですから。

日本で考えていたこと、聞いていたこととのあまりの懸隔の大きさは、たとえば開拓移民、満蒙開拓青少年義勇軍の実態であった。そうした差別の構造については高橋和巳は十分に認識していた。

それは五族協和の鼓吹にもかかわらず、かつて日本の居留民は満洲人を顎で使い、中国人をチャンコロと罵っていた……

メランコリーによって過去が語られるとき、その片側だけの感傷では、満洲国の成立と拡張の過程で行われた諸々の罪行が消し忘れられる危険性を高橋和巳は警鐘していたのである。どのような正義がかつて君臨していたとしても、歴史の現実を直視すれば、加害者であったことをまず想起しなければならない。作品ではそうした感慨の落差を、戦後の虚栄のなかでさらに昇華させるべきであった。

粉飾された正義の裏に秘匿された蛮行、侵略は深い傷跡を残した。日本の敗戦まで、敗戦以降もまた、その痛みは完全に払拭されたわけではない。満洲という時代を想起するとき、それは中国においてなお「偽」という言葉を冠して用いられるように、それはすべての中国人にとって屈辱の歴史であったことを心に刻まねばならない。満洲国の興亡を背景に描いた作品としては、戦後、宮尾登美子『朱夏』、三木卓『砲撃のあとで』、水上勉『審陽の月』、また、近年ではなかにし礼の『赤い月』を挙げることできる。さらに叙情的な懷郷を描いた清岡卓行『アカシアの大連』なども挙げることができよう。『墮落』はこれらの作品群にあっても戦後認識を正面から捉えた作品として異彩を放っているものの、リアリティについては、多くの問題点を残している。これに関しては本多秋五によって中国文学者特有の「懸河の弁」が指摘されているが<sup>注⑧</sup>、主題に対して過剰に素材を配置したところに、本質を見えづらくしているマイナス面がある。

これは敗戦直後に高橋和巳が現実を見過ぎてしまったことにあり、その後の現実を生きる前に現実Ⅱ崩壊、といった認識を自らに刷り込んでしまった悲劇があった。実際に現実に生きる人間の内面に深く潜入することなく、むしろ現実を夢を抱き、その挫折を現実と見たところに彼の美化意識があった。挫折の本質、そこにいたる過程の検討が欠落してしまっている点は、作品のほとんどの主人公が優等生、知識人、といった設定と無縁ではない。あの出発点であった『捨子物語』で描かれた下層底辺の民衆のまなざしから、リアリズムを確立すべきであった。これは高橋和巳

の自己検討であるばかりか、実は戦後文学における自己の検討の問題でもあった。理想や夢がなぜ幻影として潰えなければならなかったのか。すでに夢や理想と最初から言い切ってしまったところには、その内面性は重要視されず、むしろ美化された後に残る幻影ばかりが（熱き郷愁）として詠嘆化される結果となる。いうまでもなく、満洲国はさまざまな人間模様を産み落としたのであった。

たとえば、シベリア抑留で想起される人物に香月泰男（一九一―一九七四）という画家。一九四三年一月、三二歳で山口市西部第四部隊に教育召集兵として入隊、四月に下関を出港、朝鮮を経て興安北省ハイラル市第十九野戦貨物廠に配属される。一九四五年八月、鄭家屯から奉天（現在の瀋陽）に移動、さらに安東に南下する車中で日本の無条件降伏を知る。九月に安東、奉天を北上、シベリアに連行される。冬には零下四〇度のクラノヤルスク地区の収容所で火力発電のための薪づくりをする。苛酷な作業、厳しい食糧事情で収容後一ヶ月に三〇人が衰弱死する。舞鶴港へ帰国したのは一九四七年四月であった。「有刺鉄線は私の大切なトゲである」という、シベリア抑留の苛酷な体験を生還した後も片時も忘れることはなかった。彼は教壇に立ち絵の教師となるも、いつも近所の川を散策し、記憶への歳月を歩いていた。忘れたいのに、今の幸福、平和に浸りたいのに、凍河（エニセイ）から逃れられない。どうしたらあの歳月から抜け出せるのか。シベリアで生と死の極限を生きた人間にとってはその後の人生は虚無に近いものなのだ。何をやってもあの時代に並ぶものがない。「生の充実」といつてよいものの、極限を体験した者にしか分からぬ「命のかけがえのなさ」。そうした不条理の囚われ人こそを、『墮落』で描かれるべきではなかっただろうか。

あるいは尾崎庄太郎という生き方。『墮落』の主人公、青木隆造と同じく上海の東亜同文書院に学び、その後、満鉄調査部勤務を経て、反戦運動に従事。戦後は中国研究所の設立に奔走し、傍ら『毛沢東選集』の翻訳出版など中国研究者として学究に身を投じた。青木隆造の戦後はこうした自己の生き方に信念を持ち、ヒューマニズムを貫いた生涯とは対極にある。とはいえ、戦後の生き方において一時期であれ、奉仕を貫いた過去をもう少し丁寧に照射すべきではあった。ただ心情的な「墮落」に流れ過ぎたために、背負うべき課題が薄まったことが惜まれる。

ここで高橋和巳の満洲国への関心をその資料によって確認しておこう。高橋和巳文庫には生前、高橋が所蔵していた文献のほぼすべてが含まれており、創作の背景を知るうえで参考になる。満洲国に関しては、『満洲開拓史』（満洲開拓史刊行会、昭和四一年）、『満洲開発四十年史』（満洲史会、一九六四）、『満鉄に生きて』（伊藤武雄、昭和三九年）、『見果てぬ夢 満洲国外史』（星野直樹、一九六三）などが記されている。日本人では橋樑、大川周明の著作、また中国の革命思想については孫文の『三民主義』や、黄宗羲の『明夷待訪録』、『李大釗文集』などの著作を見ることが出来る。『墮落』の構成の基本的史料は渉獵されていたといえよう。

『墮落』が執筆された当時は、まだ日本人の戦後認識、戦後責任という認識の実態はそれほど明確ではなかった。一九七〇年代に入って熾り始める東南アジアにおける反日感情、そして一九八五年前後からのアジア諸外国からの教科書批判、また八〇年代中期からいわゆる残留孤児の間

題が露呈する。九〇年代になると侵略の象徴としての旧日本軍「七三一部隊」の存在、国際条約に違反して行なわれた細菌戦や毒ガス戦の実態が明らかにされ、戦争被害者たちの告発が始まる。従軍慰安婦問題、重慶無差別爆撃、南京大虐殺の真相究明、強制連行の問題――。清算されない戦後は現代の政治体制にまで影をおとし、被害訴訟をはじめさまざまな問題も後を絶たない。戦後レジームからの脱却もまた容易ではない。高橋和巳はこれらの問題を果して予知していたのだろうか。満洲に関する研究、総括も十分ではなかった当時を考えると、決して小さくない制約を認めるのであるが、とはいえ満洲国問題に戦後の日本人の精神的な「負」の構造をみようとした視点は優れて透徹したものであったといえよう。

高橋和巳を読み解くキーワードとして「タナトス」という用語を用いたのは久間十義であった<sup>注⑩</sup>。タナトス (THANATOS) とは、ギリシャ神話で死を擬人化した神であり、また死の本能を意味する。フロイトは人は生得的に生の本能と対立して死 (破壊) への本能を持つとした。この本能とは衝動であり、人類の戦争の歴史はまさにそれを物語っている。言いかえれば「エロス」である。プラトンは肉欲から始まって愛の種々の到達段階を説いた。最高の純粋な愛は美のアイデアに対する憧憬であり、エロスこそは真善美に達しようとする哲学的衝動であるのと対立する。エロスが後天的衝動とすれば、タナトスは生まれながらにして持つところの衝動なのである。しかるがゆえに、人はキリストの愛、自己犠牲的行為による救済、神が罪人たる人間に恩寵を与えんとするアガペー (象徴的な「救済愛」) を求めるのであろう。高橋和巳は「生の本能」に対して、無機質の不変性に回帰しようとする「死の本能」(＝「墮落」) 的な衝動に真実を見出したかったにちがいない。

最後に、中国人、朝鮮人の立場からの次のような指摘があることも紹介しておこう<sup>注⑪</sup>。

一つ残念なことは高橋和巳がこの作品で中国人の側の、この幻の国についての憎悪や憤激、あるいは満洲に住んでいる朝鮮民族、満洲人の不安や期待、反感や心情をも描ければよかったと思う。

作品のなかに反戦思想をくみ取ることには躊躇しなければならないが、視点の一元性については正鵠を得たものといえよう。開拓移民のなかには朝鮮人も多く含まれていたし、今日では国策の名のもとに大陸に送り出された被差別部落移民の集団自決なども明らかにされている<sup>注⑫</sup>。差別とは何か。日本社会における本質的な課題を積み残していることにも、あらためて「語られざる」満洲の存在が問われているのである。

#### 八、おわりに、あわせて陳子建『偽満洲国』(二〇〇〇)によせて

二〇〇七年十二月十三日、中国から永住帰国した残留孤児四十人が、国の誤った政策で人間らしく生きる権利を侵害されているとして、国に賠

償を求めた訴訟の控訴審第一回口頭弁論が東京地裁であり、原告は訴訟を取り下げた。前後して十二月六日、福田首相は首相官邸で中国残留孤児訴訟の原告団と面会し、これまでの政府の対応を謝罪した。「皆さんは日本の国民なんですね。ほかの日本の国民と同じような幸せになる権利を持っています。政府が何もしてこなかったわけではないが、年金の特別措置や日本語教育が十分な成果をあげていないのは事実だ」と、時折、声を詰まらせながら語った（以上、朝日新聞より）。こうした戦後処理は文学的主题のみならず、日常生活においても殆ど看過されてきた。

政治、社会の偽装、隠蔽レベルでいえば、現代社会は高橋和巳が描いた当時よりもはるかに複雑に、かつ広域に混迷を際立たせた。政策の停滞と企業の不祥事、偽装の数々は、戦後日本が清算しきれていない状況を反映していないと嘯けようか。その意味で現代は新たな煉獄の時代というにふさわしい。それを感じしえないのはひとえに文学の力、歴史的想像力の欠如、さらに言語と文学の間に横たわる社会的視野の実験を疎んじてきた結果にほかならない。思えば、戦後の日本の歴史は、敗戦というトラウマとの格闘の歴史であった。だが、高橋が惹起したような問題にも正視しえなかったために問題はさらに先送りされ、もはや治癒が不可能なまでに肥大してしまっている。おそらく作品化する際のテーマとしては数え切れぬほどの悪の闇である。拱手傍観あるいは対岸の火事のごとく諦念のままに生きて行けば、おそらく社会の癌細胞はより一層深く進行するであろう。文学がそのために何を成しえるのか。かつて問われたことの意味を「人間として」の態度からもう一度問うてみたい。

現代中国の女性作家の一人である陳子建（一九六四―）は二〇〇〇年に『偽満洲国』を発表した<sup>注②</sup>。一九三二年から一九四五年まで（前編は一九三八年まで後編は一九三八年から）を編年体にして著した大河小説である。時代に翻弄される複数の人物のなかには石井四郎や北野政次七三一部隊長も登場する。この歴史的全体小説はたとえば、個人的体験を基調とした、宮尾登美子の『朱夏』（一九八五）や、水上勉の『瀋陽の月』（一九八六）、なかにし礼の『赤い月』（二〇〇一）、『戦場のニーナ』（二〇〇七）などのモチーフ、作品構成とは質的に大きく異なっている。ビルドゥンクスロマンという全体小説への志向をもった高橋和巳は遺稿として「遙かなる美の国」の断片を書き残している。高橋和巳がもつとも書きたかったモチーフ、それは「満洲国」であり、その幻影を引き摺る戦後日本の精神史であったことを確認しつつ、本稿を閉じることとしたい。

注

- ① 『『死霊』からキッチンへ——戦後五十年の日本文学』（川西政明、講談社新書 一九九五）など。
- ② 『新研究資料現代日本文学』第二巻、小説Ⅱ 明治書院 二〇〇〇
- ③ 柄谷行人「高橋和巳の文体」、および川村湊『戦後文学を問う——その体験と理念——』岩波書店、四九―五〇頁。
- ④ 『墮落』は文芸誌『文藝』に「書き下ろし長篇二八〇枚」として発表されたのち、単行本として『墮落』（河出書房新社、一九六九年二月）が

出された。全集には第四巻に『もうひとつの絆』、『白く塗りたる墓』とともに収録されている。また作品集には第五巻に『我が心は石にあらず』とともに収録。また昭和文学全集（小学館）二四（一九八八）には、田久保英夫、倉橋由美子、黒井千次、辻邦生らとともに『悲の器』と合わせて収録される。文庫本では新潮文庫、講談社文藝文庫におさめられる。新潮現代文学第七〇巻には『我が心は石にあらず』、『散華』とともに収録されている。なお、作品には「満洲」という表記になっており、本文ではこの表記に統一した。但し、引用文献資料にあつてはこの限りではない。

⑤なお、作品における時間的構成の非整合性については亀井秀雄（一九七四）、伊豆利彦（一九七四）の指摘がある。

⑥藤井昇三「暗喩としての満洲国―高橋和巳『墮落』の構造」『文藝』第三〇巻三号 一九九一年秋季特大号 小特集 没後二〇年・高橋和巳再読。なお、藤井論文では青木隆造らの人物名の創造にも満洲国の暗喩を解説している。

⑦太田代志朗『高橋和巳論序説―わが遙かなる日々の宴』（三七～三八頁）

⑧加藤陽子『満洲事変から日中戦争へ』（岩波書店、二〇〇七）から再引用。

⑨駒井徳三「独立前史と建国創成期の思い出」、宮内勇編『満洲建国側面史』新経済社 一九四二・一二

⑩座談会「われらの戦後二十年」（石原慎太郎・江藤淳・開高健・高橋和巳・武田泰淳）『文藝』一九六五・八

⑪川西政明『不果志の運命、あるいは高橋和巳についての断片的な考察』（断章―K）八九～九八頁。

⑫野間宏「新しい二つの破滅物語」埴谷雄高編『高橋和巳論』（二六〇頁）

⑬伊藤益「存在の負い目―『墮落』論」『高橋和巳作品論―自己否定の思想―』（一九九～二〇〇頁）

⑭橘外男「新京・哈爾濱赤毛布」『ワンダーランド満洲放浪篇』中央書院 一九九五

⑮「満洲国」については、山室信一『キメラ 満洲国の肖像』（中央公論社、二〇〇六増補版）などを参照。また、岡部牧夫（二〇〇七）は満洲国の虚構性として、「中国国民革命への敵対性」「ソ連への敵対性」「植民地の産業開発」「民衆の身体。生命」「中国の損失」という多角的な検証の必要性を強調している。なお満蒙開拓民、満蒙開拓青少年義勇軍については田中（二〇〇四）、中村（二〇〇七）などを参照。

⑯松村高夫「『七三二部隊』をめぐる今日の課題―敬蘭芝さんを偲ぶ会講演録」（二〇〇六、一〇、一四。於中野ゼロ）

⑰城山三郎『草原の敵』、『硫黄島に死す』（新潮文庫一九八四）に収録。

⑱「創作合評」（山本健吉、福永武彦、本多秋五）『墮落』高橋和巳『群像』昭和四〇年七月号

⑲久間十義（一九九一）「うるわしきタナトス」『文藝』第三〇巻三号 一九九一年秋季特大号 小特集 没後二〇年・高橋和巳再読

②⑩ 朴海蘭 (二〇〇三) 『墮落』から見た高橋和巳の反戦思想』『日本学論叢』権宇、金哲会主編 中国・延辺大学出版社

②⑪ もうひとつの満蒙開拓民の悲劇については麻野涼『満州「被差別部落」移民』(彩流社、二〇〇七)、王勝今『偽満時期中国東北地区移民研究——兼論日本帝国主義実施的移民侵略』(中国社会科学出版社、二〇〇五)などを参照。

②② 北京・作家出版社、二〇〇〇年、八九三頁。上巻は「偽満洲国」建国の第一章の一九三二年から第八章の一九三八年まで、下巻は第九章の一九三九年から第十四章の一九四五年までをおさめる。なお、「満洲国」と「偽満洲国」の名称、および背景に横たわる歴史認識については、傳羽弘「從『満洲国』的称谓看語言与社会進歩之關係」『日本——語言与跨文化交際』(王秀文主編、世界知識出版社 二〇〇三)を参照。

### ●参考文献(一)・高橋和巳研究文献目録

#### 【作品】

『高橋和巳全集』全二〇巻 監修 吉川幸次郎・埴谷雄高 河出書房新社 一九七六—一九八〇

『高橋和巳作品集』全九巻別巻一 河出書房新社 一九六九—一九七二

『高橋和巳全小説』全一〇巻 河出書房新社 一九七五

『高橋和巳コレクション』全一〇巻 河出文庫 一九九六—一九九七

『高橋和巳短篇集』阿部出版 一九九一

#### 【雑誌特集】

『文藝』一九七一年七月号 高橋和巳追悼特集号

『人間として』第六号 高橋和巳を弔う号 一九七一年六月

『国文学解釈と鑑賞』昭和四十六年八月号 特集 高橋和巳と倉橋由美子

『対話』8 高橋和巳追悼号 昭和四十六年十月 対話の会

『国文学解釈と教材の研究』第十九巻五号 特集 井上光晴と高橋和巳 昭和四十九年四月号 学燈社

『国文学解釈と教材の研究』第二三巻一号 特集 高橋和巳の問いかけもの 昭和五十三年一月号 学燈社

#### 【単行本】(刊行順)

埴谷雄高編『高橋和巳論』河出書房新社 一九七二

高知聡ほか『高橋和巳をどうとらえるか』芳賀書店 一九七二

立石伯『高橋和巳の世界』講談社 一九七二

川西政明『不果志の運命、あるいは高橋和巳についての断片的な考察』講談社 一九七四

小川和祐編『高橋和巳研究』教育出版センター 一九七六

高橋たか子『高橋和巳の思い出』構想社 一九七七

梅原猛・小松左京編『高橋和巳の青春とその時代』構想社 一九七九

豊田豊次『高橋和巳の回想』構想社 一九八〇

真継伸彦『高橋和巳論』文和書房 一九八〇

『文芸読本 高橋和巳』河出書房新社 一九八〇

川西政明『評伝・高橋和巳』講談社 一九八一

村井英雄『闇を抱きて 高橋和巳の晩年』阿部出版 一九九〇

村井英雄『書誌的・高橋和巳』阿部出版 一九九一

小松左京編『高橋和巳の文学とその世界』阿部出版 一九九一

高橋たか子『高橋和巳という人 二十五年の後に』河出書房新社 一九九七

太田代志朗『高橋和巳序説——わが遥かなる日々の宴』林道舎 一九九九

脇坂充『孤立の憂愁を甘受す——高橋和巳論』社会評論社 一九九九

伊藤益『高橋和巳作品論——自己否定の思想』北樹出版 二〇〇二

橋本安央『高橋和巳 棄子の風景』試論社 二〇〇七

# 【論文・評論他】（五十音順）

饗庭孝男『高橋和巳と倉橋由美子』『反歴史主義の文学』河出書房新社、昭和四七年（初出、『国文学解釈と鑑賞』七一一八）

磯田光一「〈公認〉拒否の思想 高橋和巳『墮落』」『文藝』昭和四四年四月号

磯田光一「有罪性希求の文学」『文藝』昭和四六年・七月号

磯田光一「高橋和巳論——自罰者の聖痕」『昭和作家論集成』新潮社 昭和六〇年所収（初出、『講談社現代文学三一』卷末作家論、昭和四六年）

伊豆利彦「高橋和巳 作品の構造 墮落」『国文学解釈と教材の研究』学燈社 第十九卷第五号 一九七四・四

小川和祐「苛烈な夢の果てに——高橋和巳論」『昭和文学論考』三交社 一九七五所収

小川和祐「近代文学の傷痕としての『満州』体験」『別冊一億人の昭和史・日本植民地史2満州』毎日新聞社 一九七八

桶谷正昭「高橋和巳——社会正義の存在論」『仮構の冥暗』改訂増補版 冬樹社 一九七九所収（初出、『三田文学』昭和四二年一〇月号）

小田切秀雄「満洲事変から四〇年の文学の問題」東京新聞一九七一年三月二三、二四日

亀井秀雄「時間的構成の問題——方法と文体」『国文学解釈と教材の研究』学燈社 第十九卷第五号 一九七四・四

川西政明「解題」『高橋和巳作品集』第五卷 河出書房新社 一九七二

川西政明「解題」一九七五『高橋和巳全小説』第八卷 河出書房新社 一九七五

川西政明「解題」『高橋和巳』新潮現代日本文学第七〇卷 一九八〇

川西政明「解題 破滅の美学」『墮落』講談社文芸文庫 一九九五

川西政明「解説 滅亡の原型」『孤立無援の思想』高橋和巳（岩波書店、同時代ライブラリー、一九九二）

菅孝行「高橋和巳」『延命と廃絶——昭和の時間と文学の党派性』河出書房新社 一九七五所収

柄谷行人「高橋和巳の文体」『海』昭和四十五年八月号

紅野謙介「劇的なものの憂鬱——『散華』再読」『文藝』第三〇卷三三三 一九九一年秋季特大号 小特集 没後二〇年・高橋和巳再読

白川正芳「高橋和巳」『現代文学の思想』冬樹社 一九七四年所収

杉浦民平「『散華』と『墮落』」『人間として』第七号 筑摩書房 昭和四五年六月

利沢行夫「乱生の文学——高橋和巳論」『戦後作家の世界』（荒地出版社）一九七一所収

久間十義「うるわしきタナトス」『文藝』第三〇卷三三三 一九九一年秋季特大号 小特集 没後二〇年・高橋和巳再読

藤井省三「暗喩としての満洲国——高橋和巳『墮落』の構造」『文藝』第三〇卷三三三 一九九一年秋季特大号 小特集 没後二〇年・高橋和巳再読

「〈個〉と戦後3 高橋和巳」（池田洋一郎）一九九五年八月二日朝日新聞夕刊

槇山朋子「『黄昏の橋』論——あるいは漱石への逆行」玉井敬之編『漱石から漱石へ』（翰林書房）所収 二〇〇〇

東口昌央「〈感情〉という不可解なもの——高橋和巳『悲の器』論」『立命館文学』第五九四号 二〇〇六

渡辺広士「戦後派」はどう受けとめられたか『国文学解釈と教材の研究』特集…戦後文学史の検証——八〇年代を迎えて 第二五卷五号 学燈

社 一九八〇・五

朴海蘭『墮落』から見た高橋和巳の反戦思想』『日本学論叢』権宇、金哲会主編 中国・延辺大学出版社 二〇〇三  
創作合評『墮落』高橋和巳』（山本健吉、福永武彦、本多秋五）『群像』昭和四〇年七月号

座談会「われらの戦後二十年」（石原慎太郎・江藤淳・開高健・高橋和巳・武田泰淳）『文藝』昭和四〇年八月号

座談会「戦後派の再検討」（川村湊、富岡幸一郎、柘植光彦）『国文学解釈と鑑賞』第七〇卷十一号 至文堂 二〇〇七・十一

### ●参考文献（二）社会背景

麻野涼『満州「被差別部落」移民』彩流社、二〇〇七

五十嵐恵邦『敗戦の記憶 身体・文化・物語1945―1970』中央公論新社 二〇〇七

岡部牧夫「いま満州国をどう見るか」『中帰連』三九 特集：偽りの王道楽土「満州国」二〇〇七冬

岡村牧夫『満州国』講談社学術文庫（新版）二〇〇七

尾崎庄太郎『われ、一粒の麦となりて 日中戦争の時代に生きた中国研究家の回想』桐原書店 二〇〇七

加藤陽子『満州事変から日中戦争へ』岩波書店、二〇〇七

橋外男『ワンダーランド満州放浪篇』中央書院 一九九五

田中寛「満蒙開拓青少年義勇軍の生成と終焉」同著『負』の遺産を越えて』（私家本）所収 二〇〇四

『満州』の遺産』朝日新聞夕刊二〇〇五・八・二二（九・九連載）

中村秋雄『ああ満蒙開拓青少年義勇軍』新風舎 二〇〇七

松村高夫『日本帝国主義下の植民地労働史』不二出版 二〇〇七

宮内勇編『満洲建国側面史』新経済社 一九四二・一二

山室信一『キメラ 満洲国の肖像』中央公論社、二〇〇六増補版

遅子建『偽満洲国』北京・作家出版社、二〇〇〇

傳羽弘「從『満州国』的称谓看語言与社会進歩之關係」『日本 語言与跨文化交際』（王秀文主編）世界知識出版社 二〇〇三

孫春日『満州国』時期朝鮮開拓民研究』延辺大学出版社 二〇〇三

王勝今『偽滿時期中国東北地区移民研究——兼論日本帝國主義實施的移民侵略』中国社会科学出版社、二〇〇五  
宋闢全『満洲国遺民 ある在日朝鮮人の「眩き」』風媒社 二〇〇七

### ●参考文献(三) 文学的背景、その他

- 佐藤勝・山田博光・伊豆利彦・鳥居邦郎・亀井秀雄・堀木博礼『シンポジウム日本文学—戦後文学』学生社 一九七七  
松原新一・磯田光一・秋山駿『増補改訂戦後日本文学史・年表』講談社 一九八二  
清水孝雄・助川徳是・高橋昌子『近代日本文学史』双元社出版 一九八六  
『新研究資料現代日本文学』第二卷、小説Ⅱ 明治書院 二〇〇〇  
編集年表の会(石崎等、石割透他)『近代文学年表』双文社 二〇〇五  
川西政明『「死霊」から「キッチン」へ—日本文学の戦後五〇年』講談社現代新書 一九九五  
川村湊『戦後文学を問う—その体験と理念—』岩波書店 一九九五  
桶谷秀昭『昭和精神史・戦後篇』文藝春秋 二〇〇〇  
財団法人日本近代文学館『高橋和巳文庫目録』日本近代文学館所蔵資料目録二八 二〇〇二  
小此木啓吾『フロイト 思想のキーワード』講談社現代新書 二〇〇二  
尾崎庄太郎『われ、一粒の麦となりて』柏書房 二〇〇七  
増田洋責任編集『小磯良平』現代日本素描全集9 東京・ぎょうせい 一九九二  
城山三郎『草原の敵』(『硫黄島に死す』新潮文庫、一九八四所収)  
宮尾登美子『朱夏』集英社 一九八五  
水上勉『瀋陽の月』新潮社 一九八六  
立花隆『シベリア抑留 香月泰男の世界』日本経済出版社 一九九八  
なかにし礼『赤い月』新潮社 二〇〇一  
なかにし礼『戦場のニーナ』講談社 二〇〇八  
高井有一『時の潮』講談社 二〇〇二

(二〇〇七年九月二十八日受理)